

## 【学位論文審査の要旨】

我が国の河川の汽水域では、淡水と海水が混合することにより特有の環境が形成される。そこには汽水性特有の魚類や底生動物が生息するとともに、これを捕食する鳥類等がみられ、独自の自然環境を形成している。汽水域のうち水際の湿地には、止水性の環境が形成され、魚類の産卵場や仔稚魚の生息場として、湿地特有の環境を形成している。しかし、1960年代の高度経済成長期以降、我が国の河川の河口では港湾等の整備のために埋め立てが進み、多くの湿地が消失した。

都市中小河川では3面・2面コンクリート化が進行し、水際の湿地は完全に消滅したが、高度利用が進んだ河口や直立護岸が連続する中小河川での水際湿地の再生は実質困難である。一方、大河川に目を向けると、治水面や利用面の目的から、高水敷は低水路と明瞭に分離され、グランド等として整備されている河川が多いものの、この一部を切り下げることで、湿地の再生の余地が残されている。

汽水性の湿地の創出においては、塩分の供給源となる低水路に加え、湿地内の塩水の挙動を考慮した検討が必要と考えられる。さらに底質中に生息するカニ類やゴカイ類等のベントスのことも考えると、土壌塩分のコントロールも必要となる。しかし、汽水域の湿地の土壌塩分の挙動に着目した研究事例はほとんどない。

そこで本研究では、荒川下流域を対象として河岸湿地における長期塩分変動を推定するモデルを開発した。さらに、この結果を入力条件として、湿地内の湛水塩分と土壌塩分を推定するモデルを開発した。

本研究で得られた主な成果は以下のとおりである。

(1) 河川の塩分の観測結果から、小潮、中潮、大潮の塩分の挙動として、中潮の表層塩分が最大となり、月齢に伴い周期的に変動していることが分かった。この変動をモデル化するにあたり、長期計算には実務上の制約が大きい三次元や鉛直二次元ではなく、実用性を重視して半経験的なモデルとした。まず、流量が少なく東京湾の塩分が安定している冬季を対象として、小潮の塩分成層を表す指標としての「下層と表層の塩分差 ( $\Delta S$ )」、強混合に伴う塩水層後退の指標としての「下層と表層塩分の平均値 ( $S_{av}$ )」を設定し、低水路の流速振幅  $\Delta U$  との関係を一階の微分方程式で表現した。

(2) 洪水が連続する夏季は上記モデルによる再現性が悪く、これは下流端としての東京湾塩分を一定にしていることが原因と考えられた。洪水が連続すると東京湾には荒川以外にも多摩川や江戸川からの淡水が供給されて、海域の塩分濃度が低下する。そこで、東京湾の実測塩分と低水路表層塩分の関係を上記のモデルに組み込み、洪水期を含む通年の検証を行って、良好な再現性を確保できることを示した。

(3) 湿地土壌の組成はシルト・粘土質が 72.1%であり、土壌塩分の鉛直分布を定期的に測定した結果、月単位のみならず日単位でも土壌塩分は表層から 40cm の全層に渡りほぼ一様に変動することが分かった。また、簡易的な透水試験を現地で実施したところ、生物由来の穴を維持した試料の透水係数は  $1.3 \times 10^{-1} \sim 1.9 \times 10^{-2} (\text{cm/sec})$  を示し、みだして穴をな

くした試料の透水係数より 104 オーダー大きいことが分かった。この原因として、湿地土壌にはカニ類やゴカイ類により形成された穴が多数見られ、この穴が透水性を高めていることを確認した。この結果を踏まえて、一階の微分方程式で表現される半経験モデルを開発した。入力条件には先にモデル推定した低水路表層の塩分時系列を用い、土壌塩分を通年で良好に再現できることを示した。

(4) 実在する小規模湿地の面積を拡大した場合のシナリオ検討を行った。まず、「低水路表層塩分推定モデル (第 3 章)」、「土壌塩分推定モデル (第 4 章)」, 及び「平面二次元モデル (第 5 章)」を連結することにより、潮汐、河川流量、東京湾の塩分のみを入力条件として、湿地内の湛水塩分と土壌塩分の長期の予測が可能であることを示した。さらに、面積の違うモデル湿地を設定して、塩分環境の変動をシナリオ検討し、本モデル群が汽水性湿地の創出の検討ツールとして使用できることを示した。

以上要するに、本論文は、大河川下流部の河岸における汽水性湿地について、水および土壌の塩分長期変動特性を明らかにするとともに、その予測モデルを提案しており、環境水理学分野における貢献は大きい。

よって、本論文は博士 (工学) の学位を授与するに十分な価値があると認める。